産卵が苦手なふたなり龍皇お嬢様は
お嬢様を大好きな専属猫メイドが性教育致しますニャ♥

産卵が苦手なふたなり龍皇お嬢様はお嬢様を大好きな専属猫メイドが性教育致しますニャ♥

龍皇城・最上層

「遠路はるばるいらっしゃいませ。
私が第76代龍皇アリス・ファフニールです。」
角が生えた彼女こそ
若き龍皇で
古龍の牙で作られた
この城の主。
前には客人である人間の少女がいる。
美しい肢体を露わにした彼女は、
何かを急ぐように訴え、アリスがそれに答える。
「わかりました王女様…。
国が何度も嵐に襲われ、多くの被害者が出ると…
雷龍を孕んで戻られるとよいです。
嵐を制御する龍です。」
龍は災害をもたらすと同時に
防ぐことができる存在でもある。
龍皇は異国の巫女達に竜の卵を孕ませて、災害から世界を守るのだ。
アリスは、これからその大事な役割を果たそうとしている。
「それでは身を寄せて、こちらに口づけてください…。」

「申し訳ありません王女様…
文献通りしているのですが…
少し調子が悪いようです…。
また明日にお願いします。」
半刻ほど、2人は撫で合ったり
キスしたりを繰り返したのだが…
アリスの股間から生えている龍の排卵器官が
全く反応しなかった…。
アリスは可憐で穏やかで優しく真面目で勉強熱心で
国中、いや世界中から名君として愛されている。
欠点なんてひとつしか見られない…
そう…歴代龍皇でも例が見られないほどに…
産卵ド下手龍
なのだ！！

「あれあれ？珍しい！メイド長先輩から
ボクに話しかけてくるニャんて！」
ここは龍皇付きのメイド達の
ロッカールーム
龍皇のような人の形の龍は珍しく
メイド達は契約により各国から
派遣された他種族がおり、
それぞれ文化習慣が異なり
女たちのマウンティングの場に
なりやすかった。
自由奔放な性格の猫娘族である
イオ・ユゴユゴはマイペースで
気さくに派閥にこだわらず関わっていくタイプだが…
「ん？言葉遣いがなってないニャ？ボクが？猫娘族にとって
最上級の丁寧謙譲尊敬語であるニャを付けてるニャ♥」
もちろんウソである。
礼儀に厳しい龍皇専属メイド達の中でイオは浮かないわけがない存在だった…。

「え？お嬢様からボクにお願いが？
わかったニャ！
すぐ行くニャ！」
イオはアリスを
龍皇ではなく
お嬢様と呼ぶ…もちろん
メイド長に怒られるわけだが…
「お嬢様がイオはそのままで
居てほしいって即位の前に
言ってたのニャ！」
龍皇はイオを特別扱いすると
他のメイド達は気に入らず、
イオに当たるわけだが…
「お嬢様がボクを特別扱い
してるんじゃなくて
みんながお嬢様を特別扱いしてるだけなんだニャ。」
とイオは言うのだが、他のメイド達は
見下しているイオの言葉には耳を貸さなかった。
「お願いの内容ニャ？お嬢様から直接聞くにゃ！その方がいっぱいお嬢様と話してフワフワできるニャ！」

アリスの所に行くと、
彼女は涙ぐんで、
着衣も
整えぬまま
見上げている。
「助けて下さい…
ネコさん…。」
うぅ…

『産卵が
上手くできないのです…。
このままでは災害で
世界が滅んでしまいます…。』
「落ち着くニャ？
お嬢様は思い詰めやすいから…
とりあえず服を着るニャ？」
産卵が出来ないということは、世界を災害から守れない…
それは真面目なアリスが思い詰めてしまうのに十分すぎた…。
「私には相談できる方が、
ネコさんしかいないのです…。」

「大丈夫にゃ
ボクしかいないなら
ボクが何でも聞くニャ」
みんなアリスを、
神様のように崇めているから、
普通の女の子として相談できず、
アリスも神様として振舞わなければならなくなる。
「だからボクだけは、何があっても
アリスお嬢様の友達のままでいるんだニャ♥」
イオには心当たりがあった。
産卵が上手くいかない理由に…

「お嬢様…どこがダメなのか確かめるニャ♥
ボクと産卵をしてみるニャ？」
イオは、アリスに顔を近づけて真直ぐ見つめながら言った。
アリスも素直に頷いて真直ぐにイオを見つめた…。
「それでは…ネコさんそのまま、くちづけしてください…。」
イオは言われるがままに、アリスの柔らかい唇に軽く触れる…。
「それでは…次ですが…。」
「待つニャ！お嬢様？今のは何ニャ？」
「キスです…。」
「お嬢様…
それはキスじゃない…ニャ。」
アリスはやや不思議そうな顔をして、
少し考えてからイオに言葉を返す。
「ネコさんはご存じないかもしれませんが
古代の文献によると、
キスとは、口と口を合わせて…。」
「知ってるニャ
その文献と言うものを忘れるニャ
その通りにして
お嬢様は失敗しているんです…ニャ。」
言葉をかみしめるように時間をおいて、
それからアリスはゆっくりと頷いた。
その素直なアリスが、イオには愛おしくてたまらない。
「お嬢様は、どうしてボクを指名したのニャ？
ボクにどうして欲しい？
いいえ…ボクをどうしたい？…ニャ。」

「…ネコさん…ごめんなさい…どういう意味か解りません…。」
イオは、アリスの返答がわかっていたように、即座に言葉を切り返した。
「ボクは、ここに来て10年間、龍皇様になる前の、
普通の女の子のお嬢様の頃から仕えてきた…
その間…ずっとずっと…お嬢様が好きです…ニャ。」
アリスはイオの告白を受け止めて…。
「私もネコさんが好きです…
明るくて元気で何でも知ってて
どこでも連れて行ってくれて…
大好きですよ。」
「そのボクをどうしたいニャ？」
その質問になると、アリスは、
キョトンとした顔で見つめるだけで、
返事は出来なかった。
「ボクは柔らかくて小っちゃくて
可愛いお嬢様を押し倒したいニャ…
そしてその唇の中に舌を差し入れて…。」
「ネコさん！卑猥です！」
イオは言葉を続ける…。
「はい…卑猥に舌を絡めて、
ボクの唾液を流し込んで
お嬢様の唾液を飲み込みたい。
そしてそれから柔らかい乳房に舌を這わして
イチゴみたいな乳首を強く吸いたい…ニャ…。」

「お嬢様…それがキスです…
それがセックスですニャ…
文献をなぞるだけのものは作業ニャ…。
料理を作って愛情を込めないでどうしますか？
お裁縫をして愛情を込めないでどうしますか？
キスをして愛情を込めないでどうしますか？
わかりましたかお嬢様？…ニャ…。」

少し気恥ずかしそうにしていたアリスも
イオが真剣な口調になるとまた真面目な表情に戻った。

「やっぱりネコさんは
何でも知ってます…。
ネコさんの言うキスがしたいです…。」

「じゃあ教えて…
ボクをどうしたいニャ？」

アリスは言葉の意味を理解して、
少し考えてから答えた…。

「撫でたいです…
ネコさんの柔らかいフワフワの髪…
敏感な耳元をくすぐってそこから下に
撫でおろしたいです…。」

「ボクは今それを想像して
ドキドキしてるニャ…
愛しい人に触られることにドキドキしてるニャ♥
お嬢様は？」

「ドキドキしすぎて！
なんだか肌がピリピリします！」

「ボクはアリスお嬢様の全てを受け入れるニャ♥
だから好きにしてみてニャ♥」
2人は寝室に移り、イオはベッドに仰向けに寝て
誘うように衣服を乱して、アリスを見つめる。
「大丈夫…ボクの方がドキドキしてる…。」
少し戸惑うアリスに優しく
そう声をかけた…。

「ネコさん…可愛いです…。」
アリスは、おどおどと手を伸ばしてイオの髪を撫でる。
敏感な耳元に触れてイオがピクリと反応して
髪を撫でられて甘い声を漏らした…。
触り方はアリスの性格を物語るように
優しく丁寧に髪の流れに沿って
ゆっくりとだった…。
やん♡
ビクビク♡

「お嬢様…。」
猫を愛でるようにイオの髪を撫で続けて笑顔のアリスにイオは話しかける。
「ボク…我慢できません…ニャ。」
それは先刻に言った欲望を叶えたいと言うイオのお願いだった…
「はい…ネコさん…。」覚悟したようにアリスは頷いた…

2人は、お互いの豊満な胸を
押し分けるように。顔を近づけて
何度もキスを交わした…
ちゅ♥トロォー

イオは何度もアリスの小さな口腔内に
唾液を流し込んでいく…その回数ごとに
表情が乱れいくアリスはキスの意味を知った…
ペチャ♥
ペチャ♥

「ネコさん…お腹が熱くて苦しいです…。」
アリスには男性のシンボルがあるわけではない。
普通の女性器を持つ少女だった彼女が龍皇に選ばれた時にその証である龍の排卵器官である『龍頭』を膣に挿入された。
龍頭はアリスの膣に根を張って子宮に寄生し、アリスの卵子から龍の卵を生産し、
膣外に露出した龍茎を用いて女性に種付けするのが産卵であり龍皇の役目である。
龍頭は、宿主に産卵を促すために、膣を刺激し血液に媚薬を流し込む。
龍皇は、普通はその衝動を抑えられない…
だから多数の女性がメイドとして仕えているのだが…

アリスが産卵を苦手にしていたのは、
その衝動を理性で抑えられるほど
真面目すぎたから…
「ネコさんが
エッチなことするから…
熱いの止まらないです…。」
その抑えていた衝動が、
イオとのキスによって
アリス自身も欲情し
抑えきれないほどの欲動になって
アリスの膣から生え出ている龍が
暴れている。
「ネコさん…
私…ネコさんが大好き…
だから…ネコさんのお腹に卵を出したい…。」

「お嬢様♥いいですニャ♥
お嬢様が夜な夜な苦しそうに産卵を
我慢しているのも知っています…ニャ。」
「ボクはお嬢様の
全てを受け入れます…
…ニャ…。」
ん♥
ぺろ♥

アリスの龍頭から無数の触手がヌルリと
生え出てイオの腕を胸を拘束していく…
その触手の根はアリスの膣の中にあり
痺れるような刺激をアリスの膣に
与え続けていた…。
ンン♡
大丈夫♡
そのまま…
快感や苦痛…
龍頭と言う器官を通じて
2人は共有する…
それが龍皇の産卵…
セックスすると
言う事だった…。
イオは淡々と受け入れる。
不安をアリスに
悟られぬように…。

「ネコさんは私が龍皇になる時、
反対してくれました…
普通の女の子じゃなくなることの意味を
わかっていないって…。
今頃その意味が理解できて…
なのにやっぱりネコさんに
迷惑かけてる…
情けないです…。」
「お嬢様…
ボクが反対したのは
お嬢様の幸せを
考えてニャ…。
お嬢様を
普通の女の子として
嫁に出すのと、
今こうして
結ばれるのと
ボクの幸福度は
どっちが上か
考えて欲しいです。
…ニャ…」
イオはとても聡明な娘…
いや…龍皇に仕える者は
皆優秀な娘が選りすぐって
集まっている。
イオは道化を演じる…
そしてアリスだけは
それを理解している…。

触手はイオの四肢に絡みついて拘束する。
そして排卵器官がイオの性器の前に
来るように触手はゆっくりと
イオの身体を持ち上げていく…。
ずっとアリスに仕えていたイオは処女であった…
その恐怖を察せられないように
懸命に笑顔を作っている。

排卵器官は先の割れ目から
粘性の白濁液をイオの性器に射出した…。
その成分が充血したイオの膣の中に
染み込んでくる…快感による昂ぶり…。
アリスが常に膣の中を
排卵器官にレイプされ、白濁液を射出され
快楽に耐えているという事実をイオは知る。
ジワリと自分の愛液も溢れ出し、
こらえきれぬ快感にイオは身をよじった…。
あ♡
らめ♡
てピッ
てピッ
ビュルル…

龍頭はアリスの意志で排卵の許可を
得るが、それを得た後はアリスの意志と
別で作動する、つまりアリスが排卵が苦手
ということはなく、これまでの失敗は
ただただアリスは排卵の許可を与えなかった
だけなのだ…。
だが許可を得た龍頭は躊躇もなく
イオの処女膜を破くために、蠢いていた…。
ん♡
イっちゃいそう♡
グッ…

「痛い…ニャア…」
肉を破るように音を立てて、
膣に侵入してくる排卵器官…
鮮血が滴り落ちて、イオの少女は破れた…。
その痛みにそれまで我慢していたイオも
悲鳴をあげ始める。
イオの痛みを無視しながら
器官は突起物でかき分けてうねりながら
膣を奥へ奥へと犯していった…。
いっやぁ♡
らめらめ♡
ブチ…
ブチ…

「ネコさん…痛いですよね…
ごめんなさい…。」
アリスは手を伸ばし、
空中のイオを
抱きしめる…。
「お嬢様
大丈夫ニャ♥」
こんな時でも
優しいアリスが
愛おしい…。
そんな二人をよそに排卵器官はイオに卵を挿入するために
イオの膣の中でうねり膣を広げる。
湿り気を帯びた音を立てて粘液と愛液がこぼれていく…。

「お嬢さ…ニャアア♥
イッちゃうう…♥」
イオは絶頂に達し
膣から愛液が
溢れ出した…。
龍頭は
女の子を
犯すことを、
知り尽くした
器官である。
出血は止め
媚薬を注入し、
膣を広げ、
突起部が
振動しイオの
感じやすい所を
刺激する。
どこかに恐怖心を持っていたイオもアリスに抱きしめられて、
安心した…それと同時に体が受け入れるように絶頂し開いたのだ。

「ネコさん…あ…らめ…なにこれ…。」
絶頂を迎えたイオと
同時にアリスも
腹部にずっしりと
熱い重みを感じる…。
アリスの子宮まで届いている排卵器官は、イオの準備が出来ると
今度はアリスに排卵を促すために、膣内に媚薬を注入し、
愛液が溢れ出ると、子宮の中の卵を取り出そうとしているのだ…。

「ぁあう…♥
らめぇえ♥」
排卵器官は、
アリスの
子宮の卵を、
取り出すために、
膣の中に常時
挿入されている
触手をうねらせる…。
媚薬で満たされた
アリスの敏感な膣は
即座に絶頂を迎え
痙攣する…。
ズッ…
ズッ…

何度も絶頂を迎える…。
これがアリスの日常だった…。
毎夜のように排卵器官はアリスをレイプし
アリスの感度は開発されてその悦びを受け入れている。
そのアリスの膣内に排卵器官は、射精する。
それで卵が完成するのだ…。
ビュルル…
ビク
ビク

アリスの中で
卵が受精して
いくのがわかる…。
動きが止まり
じわじわ痺れる
感覚の中で…
アリスはそれを
感じていた…。

アリスの子宮から取り出された卵は
イオの前に来る頃には、
人の頭くらいのサイズまで成長していた…。
イオの身体は張り巡らされた触手によって逆さに向いて
無理やり重みで挿入される姿勢になっている…。

膣に挿入されている触手が
入り口を押し広げる…
その入り口に大きな卵が
当たっているのがわかる…。
信じられなかった…それが入ってくるという事実を…
ん♡
ん♡

大きな卵が腹部に収まる。
ジンジン痺れている媚薬で
痛みはなかった…
だが身体で変化していき、
臓器が押しやられていく
圧迫感にイオは苦悶の表情を浮かべた…。
ビク♡
ズッ…
ビク♡
ビク♡

湿った音を立てて
膣に挿入されていた触手が
抜け落ちて、
腹部に大きな卵だけが残された。
イオの身体は反転し
腹部が下向きに変わった…。
ズッシリとした重みで
背骨が軋むほどに曲がり、
体中が卵に引っ張られるように
体勢を崩した…。
「らめにゃ♥
こんな苦しいの
やめてニャ♥」
媚薬の影響か
イオの声には
甘ったるさが帯び、
じわじわと
身体を押し付ける
圧迫感ですら、
どこか快感に変わっている…。
あん♡
じゅる…

卵が腹部に着床すると
身体の変化を感じる…。
胸が張り母乳が噴き出る。
脳内物質が分泌され
お腹の卵を愛おしく
感じ始めていた…。
卵はイオの子宮から
卵子を受け取ってその性状を
変化させる。
産まれる龍はアリスでも
予測しか立たないのだ。
いつ産まれるかも
わからない…。
ただ排卵器官が
拘束を解かない事は
出産が近い事を
示し、
卵はビクビクと
震え始め…
それはまもなくで
あると思われた…。
ミルク出ちゃう
ニャ♡
ビュ…
ビク
ビク

卵とは殻があるものではなく、
ブヨブヨとした肉の塊の球体…
それがうねうねと
何かの形状を目指してうねりながら
膣を這い出てくる…。
少しずつ圧迫感から解放され、
その圧迫感が外に出ていく感覚は、
想像以上の快感だった…。
落ちるような浮くような
イク感覚をイオは感じ続けている。
膣の敏感な所を
肉塊のコブが
抜ける時に刺激する。
うねって膣を広げながら
そんな行為をしていく肉塊が
イオの淫靡な欲望を
満たしながら抜け落ちた…。
出ちゃうにゃ♡
フル…
フル

一番大きな塊が
抜けた時、
イオは絶頂のその上の快楽を
覚えた。
性感、出産、解放感、達成感…
そこに女の悦びの
全てが詰まっていた…。
イオは、そのまま
落ちるように
意識を失った…。
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ジュボア…

イオが目覚めた時には、すでに生まれた子龍は、
生き物としての形を成していた…。
「お嬢様？どういうことかニャ？
説明をお願いしますニャ。」
「ネコさんに
私がしたい事
聞いたじゃない
ですか？
それを何でも
していいって
言いました。」
「聞きました
言いました
…ニャ…。」
「私ネコさんとの
子供が欲しかったんです！」
「いきなり子持ちになる
覚悟はしてなかったニャ！」

「でっかい龍が生まれて背中に乗って2人でデートとか想像してたニャ！」
「それもいいですね♥次の産卵はそれで♥」
イオの身体にはまったく出産の負担はなかった。
龍の産卵は母体が全く傷つかないのだが…。
「しばらく休みたい…ニャ…。」
「はい♥その間の子育てはお任せください♥」
「…やっぱダメ一緒に居る♥抱っこする♥」
子供は二人が溺愛し大事に育て…立派な後継者になった…。

結局アリスは大事な産卵を
上手に出来るように
なれなかった…
「飢饉で民が
苦しんでいる…
では緑龍を
孕みましょう。」
「ねぇ巫女さん♥
おっぱい大きいね
触っていいかニャ？」
「あの…龍皇様…
こちらの方は…？」
アリスが産卵
できない理由は、
大好きなイオ以外との
交わりは浮気なような
気がするから…だった。
だから…
「ネコさんは産卵を
手伝ってくれる
私の大事な人です♥」
イオも一緒にしたら
浮気じゃない
と言う事で複数プレイで
産卵問題は解決した…。

アリスはまた
イオに迷惑をかけると
気に病んでいたが
元々美少女好きの
イオにとって
それはとても
幸せな事だった。
イオの
気配りができて
明るい性格は
巫女達にも好まれ
アリスは歴代最高の
産卵数をこなす
龍皇となる。
その2人を中心に
龍皇城も改革され
アットホームな
雰囲気の国に
変わった。
そして誰より
アリスとイオ
2人が幸せだった。